

# 言語障害者の集団心理療法<sup>1</sup>

## Group Psychotherapy of Speech and Language Handicapped Persons

内藤 哲雄  
Tetsuo Naito

言語障害者には、構音障害・吃音・口蓋裂によるもの、脳性麻痺によるもの、言語発達遅滞、難聴によるものなどがあり、それらの症状や発生機序は多彩である。

しかし、いずれもコミュニケーションに障害をもつ者である。彼らの所属する社会の普通の聞き手にとって、話の内容に注意を惹かれるのと同程度に、あるいはそれ以上に、話し方の異常さの方に注意を惹かれる点に共通性がある。さらに、こうした聞き手の反応を障害者が意識することで、欲求不満や劣等感を生じたり、障害が重くなったり、社会生活に不都合を生じやすいという特徴をもつ。つまり言語障害者は、話し方の異常にとどまらず、不安・劣等感・抑鬱・無気力などの傾向を示しがちであり、他人に対しては、拒否・反抗・軽蔑・孤独・引込み思案などの反応や態度を示しやすいのである(笹沼、1980)。

ところで、言語障害自体やその障害に対する他者の反応への意識が、本人のパーソナリティや対人行動に及ぼす影響は、中学生頃から始まる青年期においてはとりわけ問題となろう。というのは、児童期から青年期に至ると、自我意識が昂揚し、自己への関心や社会的関心がめばえ、他者からの疎外や自己疎外を感じやすくなるからである(内

藤、1986)。内藤・遠藤(1983)は、問題や障害をもつ中学生の悩みを検討するなかで、コミュニケーション障害者としての聴覚・言語障害者の悩みの構造についてもとりあげている<sup>2</sup>。その結果、聴覚や言語に障害をもつ中学生は、単なる身体の悩みにとどまらず、教師・友人・親との関わりについても悩みの強いことが見出された。さらに、悩みの構造を因子分析により検討したところ、学業・友人・親・性格・身体・将来の6領域にわたる多数の項目が、2つの因子に高い負荷をもち、互いに緊密に関連していることがあきらかにされた。これらの知見は、とくに青年前期にある言語障害者や聴覚障害者に対しては、コミュニケーションの障害に直接関係する領域だけでなく、学業・身体・性格・将来などの悩みにも対処できる、総合的な観点からの療育が肝要であることを示唆するものである。

言語障害者の療育に関しては、上述のような総合的アプローチのためにも、文部省(1973)の見解にもみられるような、個別指導に加えた集団指導の重要性が指摘されよう。

集団療法については、吃音者を対象とした同質集団に関するものが一般的である(例えば、対馬、1977)。このような同質集団による集団療法は、症状の改善や原因の除去にきめ細かく対処でき、個人療法を補完し得る部分も多く有利であるといえる。しかし、中学・高校の教育現場で症状や原因別に同質集団を構成することは、治療対象者数

1. 本研究は、日本教育心理学会第21回総会(内藤・遠藤、1979；遠藤・内藤、1979)および日本応用心理学会第47回大会(内藤・遠藤、1980)において発表された概要を、再考察しまとめたものである。集団心理療法の実施およびデータ分析に関しては、上記共同発表者である浦和市立教育研究所 遠藤 徹氏の尽力によるところが多い。記して謝意を表したい。

2. 聴覚障害者も言語障害者と同じく、コミュニケーション障害者として、パーソナリティや対人行動に問題を生じやすいことが知られている(例えば、住、1980)。

や運営の面から実際上困難である。このような事情から、多様な症状や発生機序をもつ、異質な言語障害者からなる集団療法の必要性が生じることになる。こうした異質集団を対象とする場合でも、比較的軽度な者に限定し、パーソナリティや対人行動の改善を主目的とするならば、かなりの治療効果を期待できるのではないと思われる。

そこで本研究では、比較的軽度で、異質な症状や発生機序をもつ言語障害者で、中学生や高校生を対象として集団心理療法の効果を検討しようとするものである。

## 方 法

集団心理療法には数多くの形態があるが(例えば、岡堂・水島、1969 参照)、本研究では対話法とレクリエーション活動を中心とし、合宿方式とした。また参加メンバーの構成や学宿の日程については、佐治・石郷岡・上里(1977)を参考にし

た。

## 参加者

参加メンバーは、以下の比較的軽度な言語障害者6名である。A:緘黙、中学生、B:脳性麻痺による言語障害、高校生、C:機能的構音障害、中学生、D:吃音、中学生、E:言語発達遅滞、中学生、F:口蓋裂による言語障害、高校生。これに、ファシリテーター2名、Fa1:教育研究所研究員、Fa2:大学院生が加わった。いずれも男子であり、参加メンバー同志およびFa2との間には面識がほとんどなかった。

## 手 続

合宿は夏季休暇を利用し、施設には群馬県赤城山の大沼に近い、浦和市立赤城少年自然の家が選ばれた。日程は2泊3日とし、大要はファシリテーターが、細部は参加者全員のミーティングで決定して、最終的にはTABLE 1のようになった。

TABLE 1 合宿の日程表

	第 1 日	第 2 日	第 3 日	
6:00		起床・洗面	起床・洗面	
7:00		所内清掃	所内清掃	
		朝のつどい	朝のつどい	
8:00		朝 食	朝 食	
9:00	集 合	地蔵岳山頂への ハイキング  (山頂にて昼食)	自由活動	
	出 発		第3回 ミーティング	
10:00			清 掃 退所準備	
11:00	往 路		退所のつどい	
12:00	(昼食)		大沼半周(徒歩) (昼食)	
13:00	大沼半周(徒歩)			ボートあそび
14:00	入所のつどい オリエンテーション 荷物の片づけ			
15:00	第1回 ミーティング			
16:00	自由活動		第2回 ミーティング	復 路
17:00	夕べのつどい		夕べのつどい	
18:00	夕 食	夕 食		
	自由活動			
19:00	卓球大会	花火大会 キャンプ・ファイア	質問紙記入 反省	
20:00			解 散	
21:00	入浴 質問紙記入	入浴 質問紙記入		
	就寝準備	就寝準備		
22:00	就 寝	就 寝		

合宿では、ミーティングの回数を多くするよりも、卓球やハイキングなどのレクリエーションを主とし、集団での共通体験をできるだけもたせるようにした。また、メンバーの積極性や自尊感情を高めることをねらい、それぞれ係を割り当てた。なお、宿泊の際の室割りは、参加メンバーとファシリテーターを別室とし、メンバー同志が親密にうちとけやすいようにするとともに、ファシリテーター同志の打合せが容易となるようにした。

効果測定に関しては、3回のミーティングのテープレコーダーによる録音、毎夕の質問紙への回答により分析された。

## 結果と考察

### 参加動機

参加メンバーの募集と合宿計画の説明は、各メンバーと親しい Fa 1 によってなされた。この理由によるのであろうが、自由記述方式のアンケートにより参加動機を検討したところ、Fa 1 による勧誘をあげる者が多く、自己変革の機会と考えていた者はみられなかった。しかしながら合宿後の反省では、全員が有意義であったと回答していた。

### 全体的経過の概要

#### 〈第1日目〉

参加直後は、メンバー相互ならびに Fa 2 とのコミュニケーションはほとんどなく、Fa 1 との間に大部分が集中していた。時間が経過し、大沼を徒歩で半周するころから参加者全員がややうちとけ、Fa 2 と簡単な会話をかわすようになった。しかし、メンバー相互の会話は依然として少なかった。この傾向は第1回目のミーティングにおいても継続しており、ファシリテーターとメンバーとの対話を中心であった。しかし、夕食後の卓球大会が始まると、競技者同志だけでなく応援者との声のかけ合いもみられるようになり、メンバー間に対話の素地が築かれ始めた。

#### 〈第2日目〉

地蔵岳山頂へのハイキングでは、参加者間の体力差からかなり遅れる者（B：脳性麻痺による言語障害）がいたが、本人が独力でついでに行こうと

努力するとともに、他のメンバー達に助けようとする行動がみられ、集団の凝集性がかなり高まったことがあきらかとなった。この点は、第2回のミーティングにおいて、単に参加メンバーの発言率が高くなっただけでなく、メンバー同志の対話の比率がかなり上昇したことからいえる。さらに、夜の花火大会やキャンプ・ファイアでも、自発的に分担・協力する行動が多くみられた。

#### 〈第3日目〉

合宿にも慣れ、メンバーは活気にあふれていたが、退所準備のためあわただしかった。第3回目（最終回）のミーティングでの発言率は、第1回目よりは高いが、第2回目とほぼ同じであった。しかしながら、メンバー間の対話はさらに多くなっており、集団凝集性が一層高まったことを窺わせる。またこの点は、午後のボート遊びにおいて、偶然発生した波で乗っているボートが流されたB（脳性麻痺による言語障害）、E（言語発達遅滞）の2人を、他のメンバー達が助けに行ったというエピソードからも支持されよう。

以上のように、全体的経過から、メンバー間の対人交流が日を追うごとに深まっていったことがわかる。

### ミーティングでの発言数

ミーティングは、毎日1回開催された。第1回と第2回は45分前後であったが、第3回目は清掃と退所準備の都合から18分となった。そこで10分あたりの発言数を指標とし、ミーティングごとに各メンバーの結果をグラフにして示したものが、Fig. 1 である。図により全体的傾向をみると、参加メンバーとファシリテーターのいずれも、第1回目と比べて、第2回と第3回目の方が、発言数は多くなっている。ここでメンバーそれぞれの変動に注目すると、A：緘黙、B：脳性麻痺による言語障害、C：機能的構音障害、D：吃音の4名は著しい増加を示すが、E：言語発達遅滞とF：口蓋裂による言語障害の2名にはあまり変動がみられないことがわかる。10分あたりの発言数をもとに、セッション（ミーティング）と個体（メンバー）の2要因を分散分析により検討したところ、TABLE 2 に示されているように、いずれも5%水準で有意差があった。

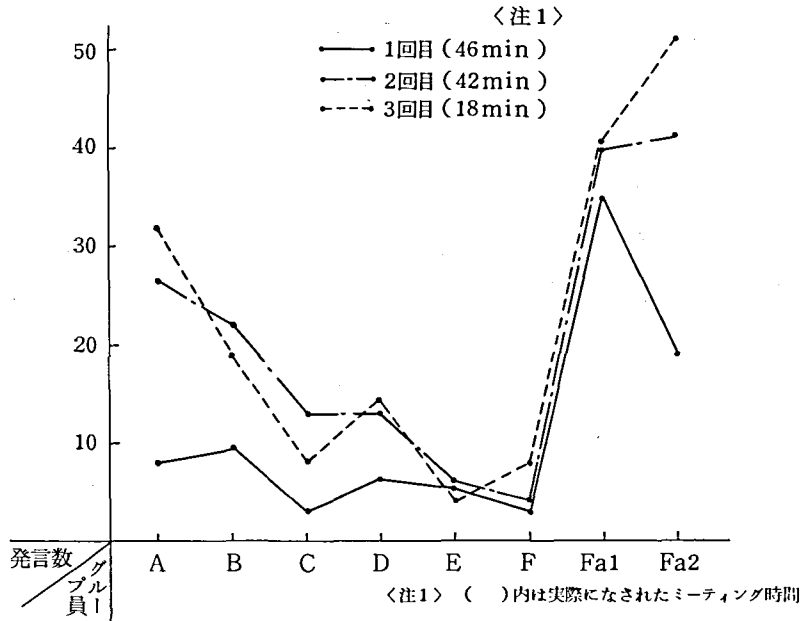


Fig 1. 各グループ・メンバーの10分あたりの発言数

これらの結果は、ミーティングを重ねると、参加者の発言数は増加する傾向にあるが、メンバーについては症状や発生機序等によって差がみられることを示唆するものである。本研究の結果からは、緘黙や吃音のような心因性のケースでは、ミーティングの繰り返しが発言数の増加につながりやすいが、器質的な要素が関与するケースでは一義的ではないといえそうである。

#### 参加メンバーの発言率

ここでは、ミーティングにおける参加メンバーの発言率および発言方向の率について検討する。

ファシリテーターの発言も含めた全発言数のなかに占めるメンバーの発言率は、TABLE 3 のようになった。表に掲載されているように、各回のミーティングにおける発言率の差を $\chi^2$ 検定により検討すると、0.1%水準で有意であった。さらに分析すると、第1回目と第2回目の間で0.1%水準、第1回目と第3回目では10%水準となり、第2回目と第3回目には差がみられなかった。第3回は、他の回の40%程度の18分であり、ミーティング開始直後にはメンバーからの発言はあまりみられないことを考慮するならば、ミーティングを重ねることで参加メンバーの発言率は増加するといえよう。

TABLE 2 グループ・メンバー (A~F) の発言数の分散分析表

変動因	平方和	df	平均平方	F
セッション	271.164	2	135.582	5.64*
個体	676.346	5	135.269	5.63*
残差	240.186	10	24.019	

\*P < .05

TABLE 3 参加メンバーの発言率

	第1回 ミーティング	第2回 ミーティング	第3回 ミーティング	$\chi^2$
参加メンバーの発言数 全発言数 × 100	38.2	50.2	45.5	15.060***

\*\*\* P < .001

TABLE 4 参加メンバーからファシリテーターへの発言率

	第1回 ミーティング	第2回 ミーティング	第3回 ミーティング	$\chi^2$
ファシリテーターへの発言数 参加メンバーの発言数 × 100	80.5	32.7	18.6	141.317***

\*\*\* P < .001

つぎに、参加メンバーの発言のうち、ファシリテーターに向けられたものの率を検討したところ、TABLE 4 のようになった。ファシリテーターへの発言率は、ミーティングの繰り返しにより、一貫してかなり低下していったことがわかる。差の検定に用いた $\chi^2$ の値も著しく大きく、0.1% よりもかなり低い水準で有意となっている。

上述の2つの結果は、ミーティングを重ねることで、参加メンバーの発言率が増加するだけでなく、彼らメンバー同志の対話の比率も著しく高くなることを示している。

### 発言内容

ミーティングでの発言内容を、Bales(1950)の категорияに従い、参加メンバーとファシリテーター別に分類したところ、Fig. 2~4 のようになった。

3回のミーティングを通じて、メンバーとファシリテーターのいずれにも多くみられるのが、意見やオリエンテーションを与えたり、求めたりする行動のcategoryであり、これに同意を示す行動が続いている。両群を相対的に比較すると、意見を与えるのはメンバーの方が、逆に求めるのはファシリテーターの方に多い。ファシリテーターを基準にしてミーティング間の変化をみると、オ

リエンテーションを求める行動が第2回目以降メンバーよりも多くなること、当初からメンバーよりも少なかった意見を与える行動がさらに減少していくことが注目される。これらはメンバーからの積極的発言が、次第に増加していくことを示すものである。

しかし、全般的にみれば、中立的な課題領域に関するコミュニケーションが中心であり、社会情緒的な領域では、category 3の、同意したり、受け身の受容を示したり、理解し、協力し、従うなどの発言がいくぶんみられたにすぎない。その他の社会情緒的な発言に関しては、category 10の、不同意を示す、受け身的な拒絶、援助の撤回が第1回目に、category 2の、緊張を緩和し、冗談をいい、笑い、満足を示すものが第2回に、若干みられた程度である。

以上の結果から、ミーティングを繰り返すことで、メンバーはかなり積極的に治療集団に参加していくようになったことが窺える。しかしながらミーティング場面に関する限り、社会情緒的側面での交流が少なく、集団のダイナミクスは十分に機能していない。これは、合宿の日程が2泊3日で短いことから、ファシリテーターが慎重に対処したことの影響が大きいと思われる。

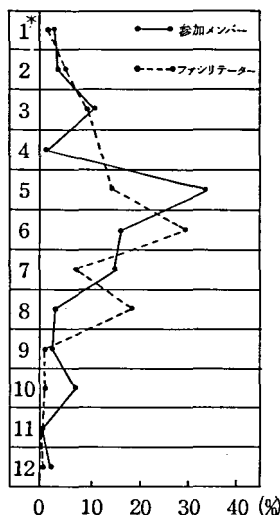


Fig 2. 第1回ミーティングの相互作用プロフィール

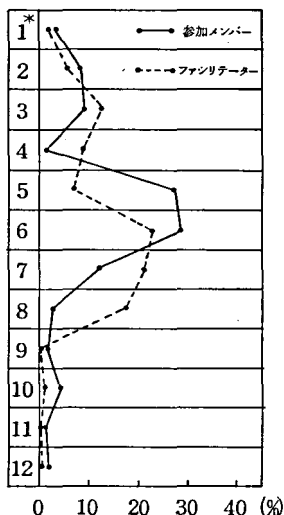


Fig 3. 第2回ミーティングの相互作用プロフィール

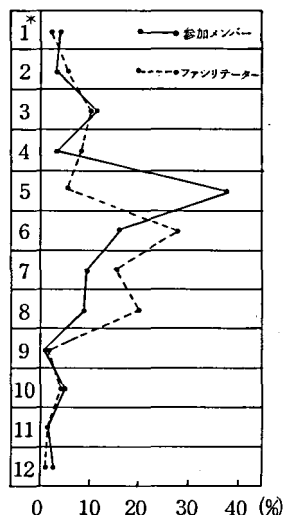


Fig 4. 第3回ミーティングの相互作用プロフィール

\* 1. 連帯性を示す 2. 緊張緩和を示す 3. 同意する 4. 示唆を与える 5. 意見を与える 6. オリエンテーションを与える  
7. オリエンテーションを求める 8. 意見を求める 9. 示唆を求める 10. 不同意する 11. 緊張を示す 12. 敵対心を示す

### 係活動に関する自己評定

既述のように、メンバーの積極性やリーダーシップを開発し、自尊感情を高めることを目的として、係活動を割り当てた。各メンバーの係名と仕事内容は、以下の通りである。

- A : 生活係 (宿泊室内の生活の世話、起床、消燈など)
- B : 研修係 (会場の準備、資料の配布など)
- C : 給食係 (食事の準備、連絡、後かたづけ、清掃など)
- D : 奉仕係 (館内全般の整理・整頓、清掃用具の整理、広場や山のゴミ拾いの計画など)
- E : レク係 (レクリエーションの諸準備、後始末、朝夕のつどいの体操などのリード)
- F : 保健衛生係 (換気、入浴の連絡、後かたづけ、病気やけがの世話)

また、それぞれの係活動への積極的関与度を測定するために、次の6尺度が用意された。

1. 積極的に活動できた。
2. 熱心に最後までやりとげた。
3. 責任を果そうと努力した。
4. みんなへの指示・連絡を、きちんと行なった。
5. 自信をもって係の仕事をやった。
6. みんなの協力が得られるように努力した。

これらの尺度に対して、「そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらともいえない、どちらかといえばそうは思わない、そうは思わない」の5段階で評定させ、これに+2~-2点を与え、合計点を算出した。従って合計値が正の場合は、全体としては積極的であり、負の場合は消極的であったことを示す。

質問紙への回答は、毎日のスケジュール活動がほぼ終了する時点で得られた (TABLE 1 参照)。それらの結果は、Fig. 5 のようになった。全体としては積極的に関与したことがあきらかであるが、各回ごとに積極的な評定をした人数と非積極的に

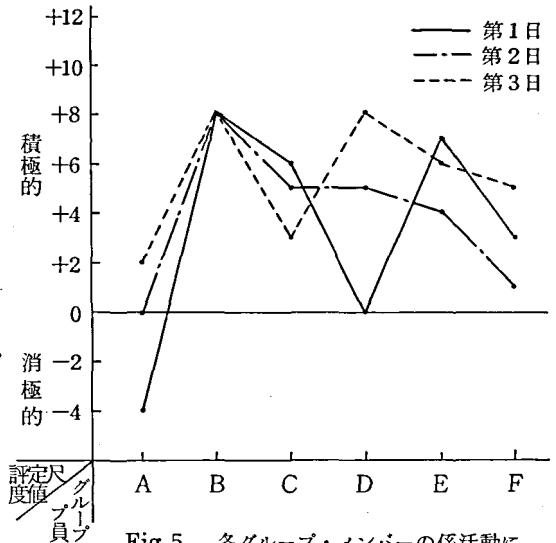


Fig 5. 各グループ・メンバーの係活動に関する自己評定尺度値

TABLE 5 係活動に関する有意差検定

日数	第1日		第2日		第3日	
	尺度値 $\leq 0$	$0 <$	尺度値 $\leq 0$	$0 <$	尺度値 $\leq 0$	$0 <$
人数	2	4	1	5	0	6
P	N. S.		N. S.		$<.025$	

評定した人数に関し、2項分布による検定をこころみたところ、TABLE 5 のような結果が得られた。日を迫るごとに積極的に評定した者の人数が増加しているが、有意差は3日目に始めて認められたことがわかる。

Fig. 5 に明瞭に示されているようなメンバーの積極的関与度の違いは、割り当てられた仕事内容の明瞭さの程度が関係したとも考えられる。しかし、積極的関与度の著しいDは、心因的な要素が顕著なものとして知られていることから、症状や発生機序による影響も大きいのではないかと思われる。いずれにしても、仕事にも慣れてきた3日目には全員に積極的な関与がみられたことから、係活動の割り当てが積極性やリーダーシップの開発、自尊感情の昂揚に有効であったといえよう。

### 対人行動に関する自己評定

対人行動の変化は、集団心理療法の効果測定のための重要な指標のひとつである。本研究では、福井（1977）によるものを参考にし、以下の11尺度を用意した。

1. みんなへの関心が
2. みんなの話を聞こうとする態度が
3. 自分を理解してもらえた感じが
4. みんなを前よりも理解できた感じが
5. 自分の気持ちをみんなに伝えることが
6. みんなと親しめる感じが
7. みんなの気持ちがわかった感じが
8. 自分がみんなに受け入れられた感じが
9. 心の通いあう感じが
10. みんなを信頼できる感じが
11. みんなとの一体感が

これらに対して、「なくなった、かわらない、やや増した、かなり増した、大いに増した」の5段階で評定させ、-1～+3点を与え、合計点を算出した。合計点が正の場合は対人交流の増加したことを、負の場合は減少したことを意味する。

回答は、係活動に関する評定に引き続いて得られた。各回答時点でのメンバーの尺度合計点は、Fig. 6 のようになった。負の値は脳性麻痺による言語障害をもつBの第1日目のみに見られ、他者との交流がいくぶんか減少したことを示している。

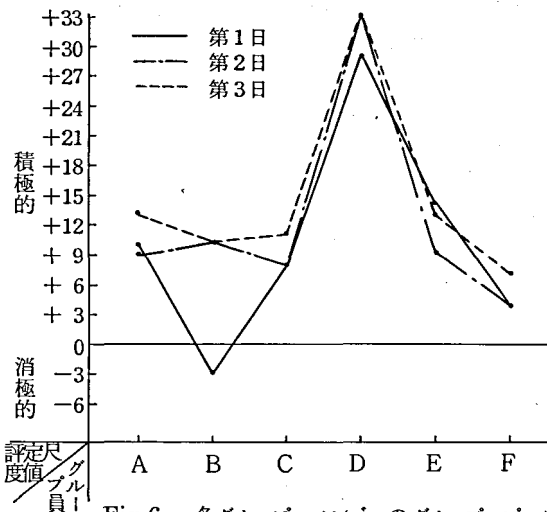


Fig. 6. 各グループ・メンバーのグループ・プロセスにおける対人行動の評定尺度値

その他はいずれも正の値であり、対人交流が増加しているが、とくに吃音のDは、3日間のいずれも突出した増加となっている。

つぎに、対人行動に関する11尺度が回答時点以前と比較しての増加を意味することから、2日目は第1日目のものと合計し、第3日目は3日間の合計を、それぞれの個人得点とした。これらの得点に基づいて、合宿日数と個体の2要因に関して分散分析したところ、TABLE 6 に示されているように、ともに0.5%水準の有意差が認められた。

上述の結果は、レクリエーション、対話、役割活動など、合宿期間中の全ての集団活動の総合的な効果によるものである。このためそれらのいずれが最も有効であったのかを特定することはできないが、ミーティングでの発言や、係活動に関する自己評定、レクリエーションでのエピソードなどから、いずれもが相乗的な効果をもたらしたと考えられよう。それらの対人交流に及ぼす効果には、脳性麻痺や口蓋裂による言語障害ではそれほど強くなく、吃音では劇的であったという違いがみられる。しかし、少なくとも軽度を対象とする限り、多様な症状や発生機序をもつ異質な言語障害集団に対し、集団心理療法がかなり有効であることを示唆するものである。そしてこの集団心理療法は、本研究の治療対象者とされたような、自我意識が昂揚し、自己や他者への関心がめばえる青年前期にある者に適用する意義は大きいであろう。

TABLE 6 グループ・プロセスにおける対人行動の評価に関する分散分析表

変動因	平方和	df	平均平方	F
合宿日数	2298.111	2	1149.056	12.00**
個体	5701.611	5	1140.322	11.91**
残差	957.222	10	95.722	

\*\* P < .005

## 要 約

言語障害者は、障害自体だけでなく、障害に対する他者の反応を意識することにより、障害が重くなったり、パーソナリティや対人行動に問題を生じやすい。こうした影響は、自我意識が昂揚し、自己や社会への関心がめばえる青年期においてはとくに問題となる。このような特徴をもつ言語障害者に対しては集団心理療法が有効であるが、中学・高校の教育現場の実情から、症状や発生機序別に同質集団を構成することは困難である。また異質な集団であっても、軽度な言語障害の場合かなりの効果が予測できる。このような背景から、本研究では、中学生や高校生で異質な症状や発生機序をもつ、比較的軽度な言語障害者集団を対象として、集団心理療法の効果を検討することが目的とされた。

治療は2泊3日の合宿方式とし、対話法、レクリエーション活動、役割活動などの複数の療法を採用した。それらの効果は、レクリエーションでのエピソード、ミーティングでの発言、係活動に関する自己評定、対人行動の自己評定などによって分析された。治療効果は心因性の障害において著明であったが、軽度な障害者を対象としたことによろうが、多彩な言語障害のいずれにも有効であることが確認された。

## 引用文献

- Bales, R. F. 1950 Interaction process analysis: A method for the study of small groups. 友田不二男編 手塚郁恵訳 1971 グループ研究の方法 サイコセラピイシリーズ 6 岩崎学術出版社
- 遠藤 徹・内藤哲雄 1979 言語障害群のグループ・アプローチ(Ⅱ) 日本教育心理学会第21回総会発表論文集、622-623.
- 福井康之 1977 グループ・アプローチの実際 (4) 佐治守夫・石郷岡泰・上里一郎編 グループ・アプローチ 誠信書房 第6章 P112-141.
- 文部省 1973 言語障害教育の手びき 東山書房  
内藤哲雄 1986 中学生の疎外感 長野大学紀要、8、1、85-93.
- 内藤哲雄・遠藤 徹 1979 言語障害群のグループ・アプローチ(I) 日本教育心理学会第21回総会発表論文集、620-621.
- 内藤哲雄・遠藤 徹 1980 言語障害群のグループ・アプローチ(Ⅲ) 日本応用心理学会第47回大会発表論文集、75.
- 内藤哲雄・遠藤 徹 1983 問題や障害をもつ中学生の悩みの構造 早稲田心理学年報、創立100周年記念特別号、19-27.
- 岡堂哲雄・水島恵一 1969 集団療法の諸形態 水島恵一・岡堂哲雄編 集団心理療法 金子書房 第3章 P62-97.
- 佐治守夫・石郷岡泰・上里一郎編 1977 グループ・アプローチ 誠信書房
- 笹沼澄子 1980 言語障害 藤永 保・三宅和夫・山下栄一・依田 明・空井健三・伊沢秀而編 障害児心理学 有斐閣 第7章 P98-109.
- 住 宏平 1980 聴覚障害 藤永 保・三宅和夫・山下栄一・依田 明・空井健三・伊沢秀而編 障害児心理学 有斐閣 第6章 P82-97.
- 対馬 忠 1977 吃音者のグループ・アプローチ 多田治夫・上里一郎編 集団心理療法 講座心理療法6 福村出版 第5章 P78-95.